

ことしの岩手をみる

県勢この一年



第25回全国植樹祭は、松尾村東八幡平で開催。天皇、皇后両陛下は、ナンブアカマツとオオヤマザクラをお手植えされた。

一九七四年。ことしの県勢は、総需抑制による財政難など、厳しい環境のもとにおかれました。

しかし、明日の岩手を築くため、最大

一月 ことしのスタートを飾る香港での初の本県物産・観光展は、十七日から同十九日まで開かれました。これは、県物産展等実行委員会(委員長 千田知事)日本貿易振興会などの主催で行われたもので、本県の誇る物産二百四十一品種、七百五十二点が出品され、好評を博しました。

一方、石油危機に伴う電力節減が行われたのもこの月です。県でも、いわゆる生活関連三法に基づく知事の権限一売り惜しみ、買い占めの規制。灯油、プロパンをはじめ特定物資の標準価格の表示命令などを行う機関として、県商工労働部内に「物資緊急対策事務局」を新設。物資の流通状況に目を光らせることになりました。

西和賀地方に豪雪。特に湯田町、沢内村などの積雪量が三メートルに達し、県では十年ぶりに豪雪対策本部を設け、各種の救援活動を展開しました。こうした中で、昨年九月、田老町に建設が決まった大規模保養基地の用地買収は着々と進みました。

二月 岩手県知事公館で失業保険制度改正問題に関する東北七県知事懇談会が開かれました。改正の問題点は、①農林水産業の出かせぎ者の失業保険給付が三十日分の一時金(現行九十日分)に減額される ②逆に保険料が三倍になる一などでしたが、東北七県に及ばず影響が大いなので、総合的な出かせぎ対策を国に要望することになりました。

県の当初予算総額は一千六百四億一千

九百五十九万円。国の公共投資抑制策のあおりを受け、苦しい財政事情となりましたが、社会福祉の充実、生活環境の整備、文教の振興などに重点をおいた予算が組まれました。

スポーツの面では、第四十二回全日本スピードスケート選手権大会が県営スケート場で開かれ、スケートファンをわかせました。

三月 県内水面総合振興計画(四十九年度一五十七年度)が決定。これは、県内の内水面における増養殖の年間生産量を四十七年基準年次の五倍にあたる四千八百ポンドの増産をめざすものです。注目の東北縦貫自動車道の用地買収が

終了しました。総延長は盛岡―一関間、九十九・四二キロ。買収に着手してから四年ぶりに終了しました。

スピード化、広域化する刑事犯罪、交通犯罪に対処する県警機動捜査隊、同交通機動隊が発足して満一年。この一年間かなりの成果を収めました。

なお、スリランカから岩手医大に空輸された角膜炎で鹿兒島医大生が光を取りもどしたり、小野田寛郎さんが二十九年ぶりにルパン島から救出されるなど、ホットなできごともありました。四月 観光シーズンをむかえ、県営北部陸中海岸有料道路「シーサイドライン」が開通しました。県営の有料道路として

は三番目のもの。普代村大田名部―田野畑村戸間十四・一三キロを結ぶ絶景のラインがお目見えしたわけです。また、かねてから建設の進んでいた宮古国民休暇村も落成しました。

公害対策の面では、県の機関に専門職員を増員し、公害防止に目を光らすこと

緑の祭典は大成功

両陛下もご臨席

五月 風薫る十九日。緑の祭典、第二十五回全国植樹祭が松尾村東八幡平の県民の森で行われました。テーマは「自然と産業が調和する緑の創造」。植樹祭には、天皇、皇后両陛下もご臨席され、盛大に行われました。まず、天皇、皇后両陛下がナンブアカマツとオオヤマザクラをご植樹。その後、ブラジルからかけつけたブラジル県人会の二十六人を

二十一遺跡にも及ぶことになり、着々と成果をあげてきました。

含む約一万六千人が、ナンブアカマツ、オオヤマザクラ、ナナカマド、シラカバなど約二万四千本を植樹しました。なお、翌日は、江刺市にある県林木育種場で、天皇陛下がナンブアカマツの種子百粒、皇后陛下がナンブキリの種子五十粒をお手まきされました。

五十三年度の完成をめざして建設の進んでいる御所ダムが、国の水源地域特別整備事業の第一号に指定されました。これは、水源地域対策特別措置法に基づく高額の補助の対象となったもので、強力な生活再建の措置が講じられることになりました。

植樹祭から数日後、「みどりある岩手ではばたけ身障福祉」のテーマで第十九回全国身体障害者福祉大会も盛岡市で開催されました。開発から埋蔵遺跡を守る発掘調査は百

また、わが国最大の規模を誇る「エイキニューパープラント(牧草を乾燥、圧縮して小さな塊にするもの)が西根町に完成。大型畜産経営をめざす本県畜産界の注目

74県勢ヒックデ

- 1 “緑の祭典”～第25回全国植樹祭～大成功をおさめる
- 2 北上山系大規模畜産開発、国の制度が確立し、事業いよいよはじまる
- 3 八戸―陸前高田線など3路線の国道昇格が決定し、道路網の整備促進される
- 4 北東北の複合流通拠点をめざす岩手流通センターの基幹施設が完成、機能を開始
- 5 初の“ミニ国体”～第1回東北総合体育大会～開催、成果あがる
- 6 生活環境の整備をめざす北上川流域下水道建設はじまる
- 7 県営北部陸中海岸有料道路“シーサイドライン”が開通
- 8 葉タバコの生産額全国第2位に躍進、全国農業コンクール上位入賞など、岩手農民の意気を示す
- 9 県下初の重度精神薄弱児施設「県立やさわ学園」が開園
- 10 室根高原、第8番目の県立自然公園に指定

を浴びました。

北上山系開発の大動脈となる大規模模貫林道工事に着手されたのもこの月です。構想ルートは、八戸市一住田町間二百五十七メートルですが、今回、工事に着手されたのは八戸市一川井村間百六十一・七メートル。五十八年度までの継続事業で行われることになりました。

さらに、ハイウェイ時代の夜明けを告げる東北縦貫自動車道の盛岡以北ルート(滝沢村一安代町、五十一・五五メートル)も発表されました。

七月 一日から国に先がけて、国民健康保険の高額療養費給付が県下一斉に行われることになり、高額療養費負担に悩む長期療養者と家族に、このうえない朗報となりました。

高速輸送時代へ対応する盛岡貨物ターミナル駅が都南村見前地区に開業。北東北の流通拠点が動き始めました。



“ミニ二国体”で本県勢は大活躍、かなり成果があがった。

水産関係に目を転じると、生産者価格の低落と漁業資材の高騰で、ワカメ養殖漁民がピンチに見まわれ関係者が一九とあってこの事業に当たることになりました。花巻市豊沢湖畔に県立野外活動センターが完成。ちょうど夏休みの時期にあつたので、七、八月の二カ月間で七千三百十五人の青少年がここを利用し、心身を鍛練しました。

実り多かつた“ミニ二国体”

八月 北上山系の大規模畜産開発は、農用地開発公団の設立でいよいよ事業が推進されることになり、県では国に対し遠野市と大槌町にまたがる新山・貞任地区をこの月に、十月には葛巻地区の事業実施を国に申し出ました。これで、農畜産物の濃密生産団地建設事業も推進の運びになったわけだ。

一方、経営が悪化した県内のバス業界は、決定的な解決策もなく、長期化の様相を呈してきました。

九月初の“ミニ二国体”ともいえる第一回東北総合体育大会が盛岡市など十二市町村、三十五会場できりひろげられました。これは、岩手県体育協会の提唱で始められたもので、国体の東北予選の一本化、東北地域の体育の振興と親善を図ることが目的。質素ながらも大きな成果をあげました。

また、この時期にイランで行われた第

七回アジア競技大会で藤原選手(紫波町出身)と工藤選手(宮古市出身)がそれぞれ自転車とレスリングで金メダルを獲得しました。

文化の面では、近代絵画に先駆的な仕事を残した巨匠萬鉄五郎の遺作千点百点が県に委託されることになりました。寄託される方は、長男の萬博輔氏で、県民は貴重な財産を預かることになりました。

「岩手勤労者いこいの村」は、全国に先がけ、西根町平笠で起工式が行われました。これは、雇用促進事業団が建設するもので、勤労者が余暇を利用して休養健康増進を図るための施設です。完成予定は五十一年四月。全国十四カ所の予定地のうち、第一番目の着工となりました。花巻空港拡張問題は、用地買収交渉が遅れていましたが、同意した地権者代表との間で調印式が行われました。

畜産と中小企業に対策室

十月 国際的な飼料作物の不作による畜産飼料の高騰や牛肉価格の低迷などの畜産危機に対処するため、県農政部に「飼料緊急対策室」を設置。同対策室では、当面、遊休耕地の活用、稲わらの飼料化などを主体に実施することになりました。また、これと並行し、肉牛生産農家に対して価格安定制度の充実を図ること、肥育農家には、負債の軽減措置を構ずるとともに、低利の肉牛経営維持資金の融

通措置などの打開策を進めることにしました。

盛岡を中心とする周辺市町村の生活環境整備と北上川清流化の目玉となる北上川流域下水道の建設がいよいよ始まりました。六十年度完成が目標です。

一方、事業所や工場などから吐き出される産業廃棄物の処理の柱となる「産業廃棄物処理基本計画」がまとまりました。

これは、五十年度をスタートとする十年計画で、成果が期待される所です。十一月 県商工労働部内に「中小企業特別対策室」が設けられました。これは県内の中小企業者のため、迅速・適確な情報の収集、分析を行うとともに、その結果に即応した特別対策を講ずるための機関。金融引き締めなど、総需要抑制下における諸問題に県、商工団体、金融機関が一体となってあたることになりました。こととして第二回目をむかえる「いわて農業まつり」は盛岡市で開催。スローガンは「育てよう みどり みり みらい」ですが、ことしは、異常気象を克服して収穫期を迎えただけに感慨深いものがありました。

かねてから国道昇格を要望していた県内六地方主要道のうち、三路線(八戸一陸前高田線、水沢一陸前高田線、津山(宮城)一関・横手線)の昇格が決定。生活道、産業道の早期改修が進むことになり、関係市町村などに朗報となりました。



よふ船霊

金野静一



その33

船の守護神として、魚師や船乗りに信仰されている船霊を、三陸海岸では「オフナダマ(船霊)」と呼んでいます。船の帆柱を立てる部分に「ツツ」と呼ばれる堅木があります。ここにマッチ箱ほどの大きさの穴をあけ、これに船霊の神体を納めて填木(つめき)をし

ておくのが、この神の祭り方です。そして、この神座を「フナダマ座」とか「モリ」などと呼んでいます。神体としては、女の毛髪、人形、サイコロ、銭、それに米麦などの五穀を使います。サイコロは二個使用し「天一、地六、表三ハラカシ、トモ四あわせ、オ

これをヨナリ神信仰と称しています。そこで考えられることは、名称が違っても、女の毛髪を神体とする船霊の信仰の根底には「生御魂(いきみたま)」としての意味から、海上遠くに出て働く男たちの身を守るという思想があったものと思われるのです。

三陸海岸では、新しい船ができあがると、船大工が、夜中にひそかに船霊を祝い込めるといふ習わしがありますが、これを「船の魂入れ」とか「ご性根入れ(ごしょうこんいれ)」「ゴシン入れ」などと呼んでいます。が、長い間不漁が続いたり、水死体を船に積んだあとなどには、「おはらい」の意味から、神体をとり替える風もあるようです。

船霊信仰の管理者は、今ではたいてい、船大工とされています。が、以前は修験者や巫女(みこ)が管掌したものと考えられます。そしてこの神は、女の神サマなので、船に女が乗ると、この神が怒って難破したり、不漁になるなどという伝承も広く

伝えられています。かつては、巫女などの特に選

ばれた女性が船霊サマに仕える風習があり、それがやがては、船霊そのもののように考えられるようになった結果、こうした伝承が生じたものと思われます。

釜石から気仙地方にかけてはサイコロと銭、若干を神体とする風が多いようですが、髪の毛を使う例も少なくありません。大きい船の神体としては、子供の育ちがよくて、自分たちも病氣一つしたくない「正直な夫婦」の髪の毛を神体とする所があります。

また、ある老漁師の話では、昔は、船霊の神体として、サイコロ二つ、穴銭十二文(一年十二カ月を意味するという)、それに、「ツキヤク」の過ぎた女性の陰毛をもらって使ったものだというのでした。

こうした船霊信仰、特に神体を船に納めるといふ習俗は、江戸時代中期以降において、廻船(定期船)の普及発達とともに、廻船の間で流行したものが、やがては全国的に普及していったものではないかと考えられています。

モカジグツサリ五、トリカジニナオシ」等とご合わせるができるような並べかたをしますが、所によって多少の違いはあります。女の髪の毛を神体としていることでもわかるように、オフナダマ様は、どこでも女の神であるとされていますが、その源は、

沖繩の「ヨナリ神」に関連するという説があります。琉球語では、姉妹を「ヨナリ」といい、すべて女の人は、その兄弟からヨナリ神としてあがめられる風があります。男子はどこにいても、必ずヨナリ神(姉、妹の魂)がつきまといつて守護してくれるという信仰で、